

## 遠藤英子<sup>1</sup>: 報告—The 16th Conference of the International Work Group for Palaeoethnobotany に参加して

Eiko Endo<sup>1</sup>: Report—The 16th Conference of the International Work Group for Palaeoethnobotany (17–22 June 2013, Thessaloniki, Greece)

2013年6月17日より22日まで、ギリシャのテッサロニキで開催された表題の会議に参加してきた。なにぶん極めて拙い英語で理解しえた限りの、しかも個人的な感想記に過ぎない内容ではあるが、簡単にご報告をさせていただきたい。

ギリシャ第二の都市テッサロニキは、エーゲ海に面した北部の港町で、アレキサンダー大王の時代には古代マケドニア王国の中心地であったという。紀元前6000年紀に遡る新石器時代の遺跡も残り、また古くからアジアとヨーロッパをつなぐ要衝でもあった。

3年に1度開かれるこのミーティングもすでに16回を数え、今回は5大陸40ヶ国近くからの参加があり、世界各地の旧石器から現代までに及ぶ熱い発表が6日間に亘ってくりひろげられた。中心となったのは、やはりイギリスやドイツといったヨーロッパの植物考古学先進地域の研究者



図2 集合写真。

たちだが、アメリカからも N. Miller や C. Hastorf などのビッグネームが顔を揃えるいっぽう、アルゼンチン、グルジア、ロシア、ウクライナ、トルコ、南アフリカなどこれまで参加の少なかった地域からの、しかも現地の方々による報告もあり、まさに国際的な学会となっていた。13のセッションが設けられ、それぞれ口頭発表とポスター発表が行われた。

その中で日本からの発信としては、セッションの一つとして、Overseas Plant Exchanges in East Asia: From Prehistory to Protohistory が組まれ、細谷葵さんがチェアを務められて、細谷葵、佐藤洋一郎、渋谷綾子、田中克典各氏が口頭発表をされた。また別のセッションでは、赤司千恵氏のアゼルバイジャンの調査、丹野研一氏のシリアの調査についてのポスター発表もあった。

それぞれの詳しい内容については IWGP のサイト (iwgp 2013 で検索してください) にセッションテーマや要旨が貼ってあるので、そちらをご参照いただきたい。また渋谷綾子さんのブログ (Japanese Archaeobotany.net) でも、今回の学会について美しい写真とともに紹介されているので、ぜひこちらもご覧いただきたい。

そのなかで、個人的興味からとくに印象に残った発表をご紹介させていただくと、D. Fuller が “The nut age?” と題して農耕開始後の社会においてもドングリやナッツ類など野生植物食料への目配りが必要だという発表をしていた。縄文時代の植物利用研究が進んでいる日本からみると「なにをいまさら」の感はあるのだが、輝けるファウンダークロップを追いかけてきた欧米の植物考古学もようやく野

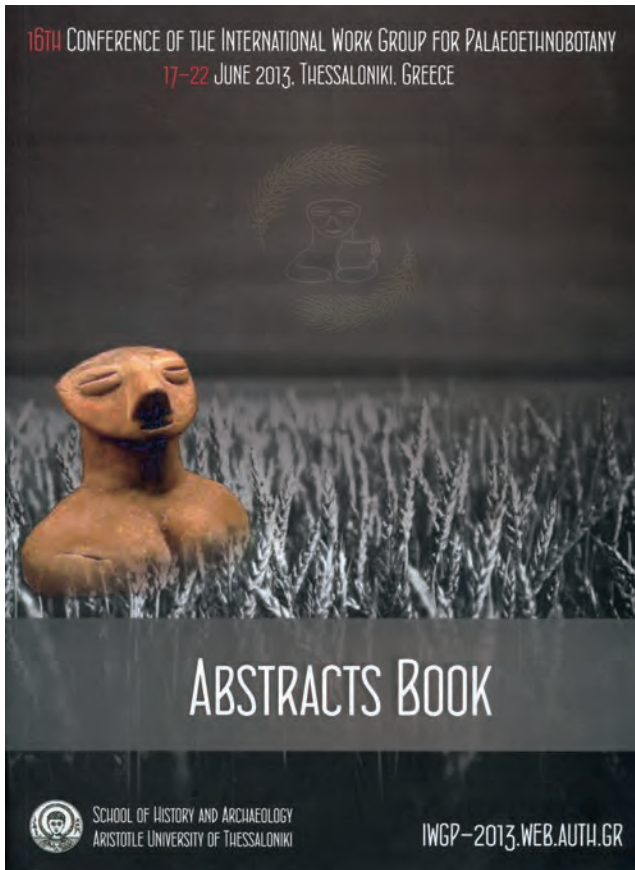


図1 要旨集表紙。



図3 圧痕が観察されたギリシャ新石器土器（底部内面）。

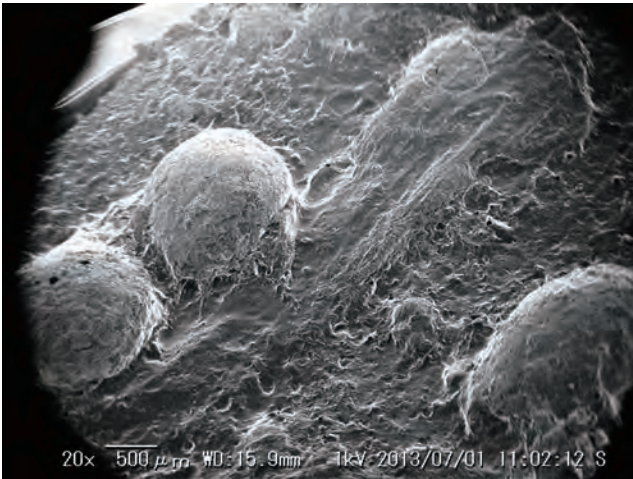


図4 図3の圧痕から採取したレプリカのSEM画像。種子や軸らしいものが観察されたが、状態が悪く同定には至らなかった。

生植物食料の重要性に気づいてくれたのかといった印象をもった。

また、ここ数十年の植物考古学を鋭く切り拓いて来たフローテーション法についても、炭化していない、水漬け状態で遺存した生の植物遺体などと比較してみると、必ずしも植物利用の全体像を示すものではなさそうだというタフォノミーの議論が、S. Colledge や F. Antolin から出ていた。これまた、いまさらながらの話ではあるが、「オールドファッション」なレプリカ法を方法論とする筆者には耳に心地よい話であった。もちろん定量的分析法としてのフローテーション法の優位は揺るがないだろうが、もともと形成過程のまったく異なる圧痕資料を「定量的議論が出来ない」と否定するのは的外れな感じがする。欧米では圧痕資料のほとんどが混和材と捉えられていることが原因のひとつな



図5 ビザンチン博物館の中庭で開かれたバンケット。ギリシャの院生とセルビアの若い植物考古学者と。

のかもしれない。

とは言いながら、圧痕＝不確実という評価はまだまだ主流で、筆者自身のポスター“Refining plant impressions using Replica-SEM method: millet cultivation in central highland Japan”は、残念ながらあまり多くの方の興味をひくことは出来なかった。多くを語るより（というか語れないので）鮮明なSEM画像を提示して、レプリカ法での種実表面の高い解像度、そこからの確実性の高い同定をアピールしようとしたのだが…。今更ながら力不足を痛感した次第である。ただ、システムティックなフローテーションや、AMS法による直接の年代測定がままならない、いわば「植物考古学後進地域」の方たちにむしろ興味を持っていただけたようで、手順の質問や、「ヒエはどうなんだ？」という踏み込んだ質問も出た。

もう一つの筆者の関心事である雑穀に関しては、学会初日にスロバキア新石器の *Panicum* データの見直し（直接のAMS年代測定で新しい資料と判明）が報告されたため、その後はみなさん雑穀に関しては消極的になってしまったような印象であった。あるドイツ人のポスター発表（LBK対象）に millet とあったので「どんな？」と尋ねると、「*Panicum*。でも、ちょっとだし…」と小声で答えてくれた。ただフランスやスペインの研究者からは青銅器時代の雑穀に関してはむしろ大きな割合を占めるという報告や、それは東方からの影響によるだろうという予測も出ていたので、この辺はまだ検討の余地がありそうだ。ドイツ新石器の *Panicum* に関しては weed という解釈が現在も一般的と思われるが（Kirleis et al., 2011）、その論文の共著者 H. Kroll も、今回の発表では“weed”と「」付けて提示し、*Echinochloa*, *Setaria*, *Panicum* は穀物よりも少ないが他

の weed よりは多く検出されるので, economic weed とでも呼ぶべきかもと発言していた。「でもみなさん, やっぱ weed だと思ってるんでしょ?」と意地悪な質問をすると「うーん, どうかなあ」というお返事だったので, こちらも議論の余地はありそう。いずれにしても雑穀, とくに *Panicum miliaceum* に関しては, すでに H. Hunt たちが指摘し (Hunt et al., 2008), 今回のテーマの一つでもあった, Food Globalisation in Prehistory across Eurasia を検討していく上で, 避けては通れない重要な研究対象だと筆者は捉えている。へこたれずにレプリカ法からこのあたりをつつついていけたらいいなどの思いを新たにした。口頭発表のなかでもアルメニアの方が「圧痕資料の無視や軽視は, 植物利用全体像の把握を誤らせる」という指摘をしてきて, わが意を得たりという気持ちになったが, レプリカ法はきつとこの分野で, とくにバルカンや中央アジアといった, 重要だが「植物考古学発展途上」な地域で有効な方法論となり得ると信じている。

また, 個人的には, 学会会場となった Aristotle University of Thessaloniki の Prof. Kotsakis をお願いして,

新石器の土器の圧痕を観察させていただき, レプリカ法に興味を持っている院生と一っしょに, 手順を教えながらいくつか実際にレプリカも採取してきた。いつかユーラシアの反対側にもレプリカ法の小さな花が咲いてくれることを願っている。

今回は, 2016 年の 5 月か 6 月にパリで開催予定である。

最後に, 今回の学会参加にご支援をいただきました三菱財団に深く感謝申し上げます。

#### 引用文献

- Kirleis, W., Kloöß, S., Kroll, H. & Muller, J. 2011. Crop growing and gathering in the northern German Neolithic: a review supplemented by new results. *Veget. Hist. Archaeobot.* 21: 221–242.
- Hunt, H. V., Linden, M. V., Liu, X., Motuzaitė-Matuzevičiūtė, G., Colledge, S. & Jones, M. K. 2008. Millets across Eurasia: chronology and context of early records of the genera *Panicum* and *Setaria* from archaeological sites in the Old World. *Veget. Hist. Archaeobot.* 17: S5–S18.
- (<sup>1</sup> 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京大学院人文科学研究科考古学研究室)